

雨から繋がる3歳児の科学する心の循環

～家庭との繋がりから育まれる科学する心～

学校法人七松学園 認定こども園 七松幼稚園 兵庫県

ここが
Point!

ふとしたきっかけで生活が変わる！ 雨からつながる3歳児の「科学する心」

偶然雨に降られたことをきっかけに、3歳児たちの探究活動がどこまでも連鎖していく様子は、まさに「科学する心」の循環といえます。当初、雨は屋外活動を中断させるネガティブなものでしたが、ある子どもが濡れる現象の面白さに気付いたこと、先生がそのアイデアを試してみたことで状況は一変します。以降、子どもたちは雨を待ち望むようになり、その興味は天気全般や空を行く飛行機にも広がっていきました。さらに、カップや傘といった雨具を製作すると、一層雨の日は待ち遠しくなって…と、ワクワクする日々が伝わってきます。素朴な日常が探究の対象になると、暮らし全体へと活動がつながっていきます。論文では、子どもや保護者の発言を丁寧に拾って活動に反映する保育者の援助、実体験を促すためのICT機器の活用方法も紹介されています。

子どもたちの自由な発想、純粋に感じた「面白そう」「やってみよう」という発想をきっかけに、保育者は保育の先入観を取り払うことができた。そして、子どもたちの主体的な行動が保護者を巻き込み、「科学する心の循環」を広げていこうとする原動力にもなっていた。

雨遊びとの出会い ～突然雨が降ってきた～

3歳児 / 令和5年 6月

今日は園庭で思い切り遊ぼう！という日。登園後、絵の具のコーナーで遊んでいた子どもが「まだ絵の具がしたい」というので、部屋でのコーナーを園庭にもっていき、園庭でも絵具コーナーを設置した。自由に絵の具遊びをしていると、ポツポツと雨が降ってきたので、保育者が急いで片付けを促した。

保育者「雨が降ってきたから急いで片付けよう！」

Y児「まだやりたかった」

S児「このまま雨に濡らしてみたら面白いんじゃない？」

保育者「面白そう！」

絵具で描いた模造紙を濡らす。保育者は部屋に戻ってから、絵の具がこれからどうなっていくのか話をしてみる。すると「色が混ざる」「絵の具が消える」等不思議さを感じる様々な意見が子どもたちから出た。雨が降っ

ている最中も、濡らしている模造紙を見に行き、雨による色の変化に気づく子どもたちの姿が伺えた。

保育者の科学する心

園庭での絵具遊び中にたまたま雨が降ってきたことで、急いで片づけなければという保育者の思いとは逆の子どもの発想に驚かされた。

次の日、子どもたちは登園するなり、濡らしていた模造紙を見に園庭に行く。

Y児「わあ。綺麗！」

H児「汚くなった、破れそう」

など感想は様々だった。雨に濡れる様子を保育者がタブレットを用いて撮影していたので、部屋で動画を見る。すると、雨の“音”に気づき「ポタポタ」「ザーザー」等、言葉で表現したり、雨で濡れた部分が「白くなっている！」と気づいたりする姿があった。

破れそう…





「他にも何か雨に濡らしてみたい」という意見が出る。廃材倉庫から子どもたちとリボンを見つけ、色付けをして濡らしてみることになった。前は絵具だったが、今回はマーカー（水性ペン）を使いたいと言う。

「雨に濡らしたい」という思いから、雨が降るのを心待ちにして、毎日保護者と天気予報を確認し、登園してくる子どもが出てきた。一週間ぶりに、待ちに待った雨が降った。

S児「先生、雨が降ってきた！」

K児「早くリボンを用意しよう！」

A児「色が滲んでいる」

T児「ボタボタ落ちている水に色がついている」

子どもたちは大喜び。保育者は落ちてくる水滴の色が見えやすいように、下に紙を敷いた。色付けしたリボンが綺麗に滲んで色が混ざる。やっと滲ませることができたと喜んでいた。

保育者の科学する心

子どもたちが毎日天気予報を確認して登園してくるようになり、家庭との連携が生まれた。子どもの好奇心がより育まれるように、保護者に保育の記録を伝えた。保護者の支えにより、子どものやりたいことができる環境を整えていくことも、保育者の「科学する心」につながる。

雨から空へ興味が広がる ～どうして雨が降らないのだろう？～

3歳児 / 令和5年 9月～

二学期が始まった。子どもたちは一学期に経験した雨の遊びをよく覚えていて、雨の話をする。「雨が降ったら傘をさして散歩したい！」という意見で盛り上がった。

夏休み中に、てるてる坊主を逆さにしていたと保護者からの声もあり、毎日、家で天気予報を確認して知らせてくれるのが定番になっている。

しかし、なかなか雨が降らない。雨を待つ日が増え、雨が降る時の空や雲はどんな色をしているのか、空や雲の絵本を読んだり、屋上へ行って雲を観察したりする日が増えた。雲の動きが早いことや、飛行機がよく飛んでいることに気づいて、飛行機に手を振ったり、友達と「あれが羊雲！」などと雲の名前を言い合ったりして遊ぶ様子が伺えた。

さらに空をよく見ていると、青色（ANA）や赤色（JAL）マーク等、違う種類の飛行機が飛んでいることを知り、「写真を撮りたいからタブレットを貸して欲しい」と保育者に伝えてきた。撮影した飛行機の写真と保育室の乗り物図鑑を見比べ、飛行機の種類を認識したり、絵本から「飛行機雲があると雨が降りやすい」ということを知ったりする姿があった。

週末に雨が降る日が続くが、子どもたちが幼稚園に居る時に雨が降ることはなかった。毎日天気予報を見てくる子どもたちも、「またずっと晴れて言ってた」「どうして雨が降らないの」「雨が降ったら傘をもってみんなでお散歩したい」と声があがった。

保護者から、「休みの日に雨が降ると、カッパを着て傘を持って“雨散歩”をしています」と話を聞いた。子



どもたちにお休みの日の散歩はどうだったか聞いてみると、

A児「ポツポツって音が聞こえた」

B児「地面が濡れていて、水たまりに長靴で入った」

と話してくれた。その話を聞いて、他の子どもも家庭での“雨散歩”が増えた。

保育者の科学する心

園庭で遊んでいる最中でも、飛行機が飛んでいると「飛行機！」と叫び、他児が「本当だ！」と反応する姿を見て、子どもの興味が友達から友達へ広がり、「科学する心」が循環することが伺えた。その後、実際に飛行機を見に行く園外保育や、雨散歩に関する声も聞こえ始め、家庭とのつながりを一層感じる事となる。子どもを真ん中に、園×家庭という関係性も深まった。



自分だけの傘を作ろう ～傘を作って空に見せるのはどう？～

3歳児 / 令和5年 10月～

なかなか雨が降らないため、保育者は子どもたちと、どうしたら雨が降るのか考えた。タブレットを使用して撮った雲や飛行機の写真を印刷して保育室に掲示すると、絵本と写真を見比べて色々な話題が生まれた。

S児「傘を空に見せたら、空が見てくれて雨が降るかも？」

M児「自分の傘を作ってみよう」

との声が上がったため、傘を製作することになった。

11月1日、出来上がった傘をさっそく空に見せることにした。

S児「空に近いところに行かなければならない」

H児「それなら屋上が一番空に近いよ！」

傘をさしながら屋上へ向かう。屋上ではみんなが「雨よ降れー！」と叫びながら、傘を高く空に見せる姿があり、気持ちがどんどん高まった。

11月6日、念願の雨が朝から降った。子どもたちは登園するなり

Y児「やっと雨が降ってくれた！」

S児「傘を空に見せたからだ」

T児「やっと散歩ができる！」

と大喜びだった。

保育者の科学する心

自然は変えられず、なかなか雨が降らないことで、作った傘を空に見せるという子どもたちの発想につながった。子どものファンタジーに寄り添って、子どもの「科学する心」の循環に身を委ねることも、保育者の「科学する心」。その循環の中で生まれる、子どもたちの「人に伝えたい」という思いを、保育者は家庭とのつながりにまで広げることができる。

「科学する心」を感じた 小さなつぶやき



3歳児

あの雲
〇〇に見える！

園庭で遊んでいる時に子どもたちが、空を見上げては、「あの雲、ハートに見えるからハート雲！」「カニに見えるからあつちカニ雲！」「ワニに見える！写真を撮りたい！」と名前を付けることが流行りに。

実践の背景や全体像、園の先生による事例分析や考察は論文をお読みください。

